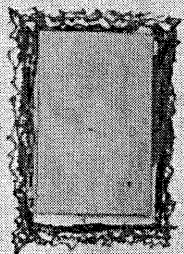


一戸拾太郎詩集

哀しき魚はゆめを

哀しき魚に氷を喫へたる弟恭三に代さく



抒情

I

しんなりとした歯牙につつまれて、
まじろい魚のやうなゆい、
じつにうつくしい貝るゑの爪、それら、
つつましく膝のうへにあるあなたの手には
赤にもまれなるふくぎ、おへてか、
ばらいるにながれ迷ひきとほる。

II

ああ、夜になると生えてくる、へにたけよ、
かなしいべにたけ、あなたの長はよ。

なんとといふまじいなやばりかきなごとか。
たとへ、はげしいま舞計がいみ出てゐても、
ふしぎなうつくしさに吸はれるわたし。
夜になると生えてくる、へにたけよ。
なまましい唇のべにたけのふくらみよ。

III

ものみな、みるくいろにとけこんでゆくころ、
柔い真夏のたそがれの匂にいまなはれ、

あなたの肩のまろみを感じる手は、

あやしい程友の林にさ迷ふとしたとまです、

熱にもつれ、ふくれあが、左利のことばは、

あなたのさ、ゆく氷の冷たさに凍り、

瞳ほかなしくとげはじめ、ながれを、

歩み帰るあなたのふくらうした着物のいろが、

遠い景色のながれとけてしまつたのちも、そののちも、

香ぐはしいあなたの足音にくらげしてゐたこと！

いつたたりうゝわたしがそのひとの手を思つてから、
 毎日、まいにち泣かぬでる甘い赤白りに迷はされ、
 街をばてなくあてどなく一日さがしあぐさ、

さて、やげとげたよるな晩の枯れ枝が、

遠いかなたの夕やげのそりにうつるころは、

地面にぐみでるさみしいもの影をながめ、

街の片ぼつれでまたわたしが啜り泣きはらめるときです。

いばまがは

いばまがはのながれのほこり

さほやかなる砂の上にくつくまりの

人にわかれ その人の手を恋ふるより

八月の空にうつり梨皮のようにさやく柳をながめ

ただになかめてくるほしからし

わかなくさのかねし心を

わがすなみだに みちたる心のそとを

はれぬかに笑みかいたでくれし子らよ。

なれら、かのほかりけき歌き
今ほた いがごとくうたふや。

—一九三〇・三・三—

ふるさと

まりにしんめりとぬれ、こんばんも、
町なみき 灯籠ほかりに透すくあたりをさまよへば、
かなたに寄よくふるさとほるかみ見えるぞ。
みどりちよう、さがらちよう、いちばんちよう
くちつさめば涙なみだなかるる。
ふるさとをばなれてそれからは、ああ、
かくも、われ、ほかなくなれるか。

—一九三〇・三・三—

夕ぐれ

たよりなくくすれてゆく陽の光のなかに
並木はほ、そりと枯れ枝をさしかほし、
夕ぐれのみさみしさをののけり。
坂のぼりゆく私の影のみぢのまに
たちどまりうち仰げば、
やばらかにかなたの空へとげゆく鐘の立目。
ああ、じいぼんの指合せて私は、祈るぞ。
わが身に幸あらしめ給へ、サントマリヤさま。

夏はしい原っぱで

なにかにの草は
いつのまにか肺病にかかり青ざめ、
とろととろに集り、ほんめりと張ぐれ。
うれはしい原っぱを、とほくまで歩いて来て
ここにうつくまる私のさびしい裸か身は
踊るる、ぐらちな血液で透明になり

大陽がひとつ心の心臓がふる動がなくなる。
太陽がにいで粉^{とが}ほいわりんねるの空へ
しんせんと^{とが}ゆくゆくいぼんの極れ本をかすめ
雪はつつまれ白くはれゆく肺臓のかたち。
そのとき、地面のそこ遠いところから、
ときれ ときれ になまばじめる 騒^{いまか}々^る。
ああ、そのこ急こそ、わたしのこと。
わたしのこと急なのですよ。

めらんとりあ

I

冬の凍ってしまった、を諸いちめんて、

脳筋のひとの胸のゆくにかすかにふくらみながら

神の方からよせくるよせくる波のむれほ、

しろくつめたくまろびつづげる こんばん

そこらあたりは現れる犬か一足血だらけで、

夜がふけるまで吠えて吠えて吠えてると

わがて 痛みのかれ^て青ざめた月が

ふかい海のそこからだんだんとくみあがる。

黒まんをを着てふくめんした

やせぎすな男かひとり、

秋も来せきりよふたる衣のちまたで

すっぱりとよ処女の裸体にすした、その

きらきらしい短剣のひかりのつめたさ。

まゆ々とした血の滴りをつにくけて

男の眼のながにはま青白い焔がもえてる

——一九二〇——

ひとり

歩いてゆく木立はふかくなり

路から路がわかれてなほ歩み入る。

あちらこちらにともる名新燈から、

くされはてた光があるへ流れ

ものうへ街の眼からのがれて、

灰色のべんちに坐りながら私は、

いんづつな石像にと合点なうてゆく

——一九二〇——

沈むころ

果くらぬ氷原をひとり、

歩まづづけてゆく私のうしろすかたのさみしさ。

今ほたよりない冬のくれがたです。

陰気な林の奥かりと鳥のながさ。

そして凍りきった地平かりひひいてくる彼のをと。

このごろ。

心臓は萌えめ^そきたま白い汁は

月光に濡れわたりそたてられ

死人の手のやうな花をひらいてゆく。

女名き流のほとり

さみしやめれ人を恋ひぬれ

今宵のこんこんたるや春をき流のほとりにあうて

遠くはるかに思ひつかれ

すべなくもまた帰らんとするに

山々の岬のあたりむらさきの木の梢らは

しら雪をかきかき空をさしとめしなかり

しんねんと音もなく燃えのぼるをゆ

燃えのぼるをゆ

はる

木のなかのよるこぼしき命あふれ
萌えいつる首を青くめぐるを

ゆばりがたつみとり高き江のせ

ほのぼのと ぼるのうれひを感ず

—一九三〇・四・三—

風景

公園の木立のなかに見えすてりれ

何時もしかかには苔夕みる池の端に

まっしろい椅子がならんである。

緑のかげの濃いあたりにならんである。

そのすっきりとした一列の側影のあるへるのぼ

ごらんなさい、噴水のまきれいなだんすのためたのです。

あめ、噴水のぼる水のしおまに濡れた向わ岸に

来夕わり帽子をかむてひとり出みなから

銀のすてつきを抱いでうつむいてる人よ。

水面にうつりいでわななく自分の影のあたりを、

なめらかに泳ぎまわる青い魚のふれを見て、

(たぶん淋しいんでしょ、たうたひとりでは)

片頬にせつなそうな微笑をうかべてふりあがり

打ちふるすてきさのうす白い煙さをのこし、

池のほとり、音石の間の白い蹴草ありあつちのぼろ

公園のほのぐらゝ木立の風火に消えらるゝと、

ゆかて椅子の(列はさらにほのかなるほまどろけに沈む)

—一九三〇・三—

珈琲を飲みて

たゞ一人日比谷の林に消えのころ雪をふかき、白く故郷

尊色の肩掛けかけて池のほとりた鶴を見入りしひとを忘れず

夕雨にぬれし木の葉は瓦斯の灯に青くゆれつゝ、消え尽しぬ 19

公園の柵のをほりの瓦斯の灯を木の葉本かくれに見つゝゆくかな

雨の降る河岸にしまらく赤煙瓦つみたる舟のすくゝるを見たり

しみくと三味線ならす向う家の瓦屋根には月の光れる

松並ぶ坂をのぼれば宿にして伽藍は立てり青空あも

遠街の燕の間のあははれて花月はたいちに笛なりけり

街角を夜更けてとほる電車の音さみたれいよ降りまするなり

噴水は五月の夜にけふれどもさびしきものほわか心かな

首原は雨にけふれりその涯の赤煙の火の煙ほの立つ

大へま

大へま

大連にゆく夜と夜を夜の日に呑噴水さびしきあはるさみたり

噴水はさかたのほり記斯の灯に映りたれども夜願ふはず

佳境のきわみまゝに書けぬの故なきをうら

雨はれて夕映えまじきもさびしき赤煙にさびし尾をぬれる馬

嘶ける馬のうしろに豆相遠とみるごとく夕焼け赤し

21

ろすやみの空になびけるさびしきよ岩木の峰は月夜に空舟の

を起への百足の夕ぐれ白萩の花ほの白く雨にゆるるも

月のした輪をなしのぐる踊子の足袋一杯に白く動けり

秋の夜の寝どめさひしも雨滴れの音にまじれる鼓次の虫の音

ほのいろき波をわけつづわか舟は一夜の隅田川を過ぎまのほるかな

橋下をすくろ小舟に入居りて櫂を押せる見ゆ月のひかりに22

九二
うす若き珈琲をのみまのしみくなめいしと大理石の台に手さふれにばう

三田らのわかえはるかまふ川の海の家なる重畳の月かな

鏡屋の鏡をたうりたるは泉舟き久のひるの光かな

あるとま

うら若き日のわか不傷は銀の虫のしらへにも似たりや

ばかなくも人を恋ひわたるなれど、まの思本はあらはする

得ず。されば、ひとり 鬱々としてあやめる六本の和

のさきよりぬくる とれら 銀銀のくらべを月あからまか

なる一夜、かの人の思心にほのかにもさ迷はしめん

かくてわか心足る、ああわか心足るなすり。

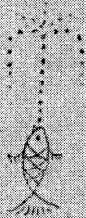
あまのこころを果てしなく愛するは、
 水も木も石も草も、
 すべてを愛するは、
 神の愛のまはりにあつた
 心である。

水も木も石も草も、
 すべてを愛するは、
 神の愛のまはりにあつた
 心である。
 大なる神の愛のまはりにあつた
 心である。
 大なる神の愛のまはりにあつた
 心である。

『 大なる神の愛のまはりにあつた
 心である。』

★目次★ 一九九一—一九二〇

掃情 I II III IV	1
いばきかほ	5
ふるさと	7
夕ぐれ	8
あまのこころ	9
めらんどりあ I II	11
ひとり	13
沈むところ	14
まがき 涙水のほとろ	15
ほる	16
風 早水	17
加那を歌みて (短歌)	19
あるとま	23



一戸玲太郎詩集『哀しき魚はゆめみる』

1921(大正10)年刊行 孔版24ページ

一戸玲太郎(一戸謙三)による、大正8年7月の日付のある和歌から、翌年6月までに作られた詩作品をあつめた第一詩集。

弘前市立郷土文学館所蔵。一戸晃氏より公開許可。